

第2日目 2024年9月8日(日)

午前の部 10:00~12:30

テーマセッション(4)

東アジアの家族変動論を考えるために——韓国の事例を手がかりに

オーガナイザー・司会 野辺陽子(日本女子大学)

討論者 本多真隆(立教大学)

齋藤圭介(岡山大学)

土屋 敦(関西大学)

【企画趣旨】

「第二の近代」と呼ばれる時代に、家族変動論が改めて問い直されている。例えば、経済発展した東アジアでは、日本を除いて「第一の近代」と「第二の近代」、「第一次人口転換」と「第二次人口転換」がデータから明確に峻別できないことから、「西欧」の経験を抽象化した家族変動論を他社会へ適用することの是非が問われている(落合 2023; Jackson, 2015)。

一方、ヨーロッパの「第一の近代」の議論まで遡ってみれば、従来の近代化論と、社会史や歴史人口学などの知見が一致しないことから、近代化を議論するには、①一次データへ着目すること、②メタ近代化論的視点を持つことの両方が必要だと提起されてきた(佐藤 1997)。この指摘は東アジアの家族変動を論じる際にも有効だろう。

現在まで、日本を含む東アジアの家族変動については、主にケアやセクシュアリティを対象に、女性に焦点をあて、実証研究とその理論化が蓄積されてきた(落合・山根・宮坂 2007など)。では、もし、女性以外の対象、例えば、男性や子どもに焦点を当てたら、今までの議論にどのような論点が提起できるだろうか。また、メタ近代化論的視点はどのように展開できるだろうか。

以上の問題関心から、本セッションでは、東アジアの社会のなかでも、特に韓国に注目し、韓国の①家族論における「伝統」の扱われ方、②若年男性の家族意識、③子どもの権利・福祉をめぐる動向について報告する。討論者は、日本のメタ家族論、男性研究、子ども研究を専門とする方に依頼し、日本との比較の視点からも議論を展開してみたい。

文献

- ・落合恵美子, 2023, 『親密圏と公共圏の社会学——ケアの20世紀態勢を超えて』有斐閣.
- ・落合恵美子・山根真理・宮坂靖子, 2007, 『アジアの家族とジェンダー』勁草書房.
- ・佐藤俊樹, 1997, 「近代を語る視線と文体——比較のなかの日本の近代化」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会, 65-98.
- ・Stevi Jackson, 2015, Modernity/Modernities and Personal Life: Reflections on Some Theoretical Lacunae, 한국사학회, 49(3): 1-20.